



▲地下鉄東西線卸町駅周辺

仙台区北六番丁の一部と南目村が合併して宮城郡原町(はらのまち)となり、南目は原町の大字地名となりました。さらに、昭和三年には、宮城郡原町が仙台市と合併し、南目は

明治二十二年になって、苦竹村・小田原村・仙台区北六番丁の一部と南目村が合併して宮城郡原町(はらのまち)となり、南目は原町の大字地名となりました。さらに、昭和三年には、宮城郡原町が仙台市と合併し、南目は

古の卸町

卸町駅は、全国規模の「卸商団地」の入り口に位置し、駅界隈は、今や現代風な商業施設の街となっていますが、今の形になる前はどのような地域だったのでしょうか。その歴史をひもといてみます。

若林区探訪 その九

地下鉄東西線開業で魅力再発見

卸町駅界隈

市内になりました。しかしながら、昭和二十七年の地図を見ると、現在の貨物ヤード東側の旧志波北・旧北宮城野には住宅地が見られるようになり、その東側の卸町付近はまだ畑が広がっていました。

物流と文化の中心として

見渡す限りの田園風景、それが昭和三十年代の卸町でした。そのころ仙台の中心市街地に集中していた卸売業者は、都市過密化により倉庫の拡大が困難になりました。問題解決のため、昭和二十九年に仙台卸商業団地建設委員会が発足しました。まず始めに協同組合仙台卸商センターの団地造成が行われ、昭和四十五年に総合卸商業団地が完成しました。その後、昭和四十六年からトラック団地、仙台中央卸売市場・倉庫団地の3団地の整備が行われ、昭和五十年に完成しました。「卸町」という町名は、昭和四十三年の卸商団地造成の折に決定したそうです。

やがて、卸町地区は、卸商団地などの流通機能が集積した東北地方最大の流通拠点となりました。現在、卸商団地では、演劇活動や音楽活動が行える「せんだい演劇工房10-BOX」、「音楽工房MOX」、「能1BOX」などの文化施設もオープンし、働く場所から多様な活動が展開できる場所にもなりました。トラックが行き交うまちから人が行き交うまちへ、物流と文化の中心として卸町は成長を続けています。

新たなまちづくり



▲卸町団地並木(提供:仙台卸商センター)

平成二十七年に地下鉄東西線が開業。その三年後には大型ショッピングセンターが卸町駅近くにオープンし、人の流れがさらに変わってきました。

仙台市の「地区計画」によると、地下鉄東西線卸町駅が卸商団地の南側に位置したことを踏まえ、卸町駅の周辺にふさわしい新たなまちづくりが提案されています。商業・文化・居住などの新しい都市機能を集め、賑わいのある新しい複合市街地として魅力ある街並みづくりをめざすものです。具体的には、卸町を五つの地区に区分し、卸町駅の周辺は、駅前地区と駅前商業地区に分けられており、建物の高さなどを制限し、周辺の居住環境の向上をめざしています。

生活の場・仕事の場・遊びの場と、三拍子そろった魅力により、卸町駅界隈はこれからも発展していくことでしょう。

(西條引地 記)

会報の愛称

「はいらいん若林」とは

仙台弁の「入らいん(お入りください)」に英語のhigh(ハイ・高い)とline(ライン・路線、進路などの意)とをかさねあわせた造語です。温かさより高いレベルをめざそうという気持ちが込められています。

地域の話題

わらを通じた交流でまちづくりを

地下鉄東西線開業イベントをきっかけに始まったわらアートも4年目を迎え、若林区の恒例行事として定着してきました。今年度は、若林区まちづくり協議会から自立し、市民有志の「せんだいわらアート実行委員会」として再スタートしました。

9月15、16日のオープニングイベント(会場:せんだい農業園芸センターみどりの杜)では、「おいしい!」をキーワードに、若林区のお米や野菜の他に、宮城県産のお肉の店も出していただき、おいしさを実感できるイベントとなりました。さらに、地元や大学生のグループのステージ発表も新しく組み入れ、若林区をより元気にしようという勢いが感じられました。

作品は、6~10m級の大型作品が5体(ティラノサウルスの親と子他)、1.8m~2.5mの小型作品が4体(ペラノドン他)と、見ごたえがあります。口の中に入ったり、内部を覗いたり、見て、触れて、楽しむことのできる作品です。

そもそもわらアートは津波被害を受けた若林区の田んぼの稲わらを使って制作したもので、作品そのものが復興のシンボルです。今後は、仙台市中心部でもしめ縄作りや体験企画を盛り込み、わらを通じた交流で、人と地域がつながるようなまちづくりに貢献したいと考えています。

せんだいわらアート実行委員長

広瀬 剛史



▲トリケラトプス(わらアート)

駅周辺の活性化をめざして

「薬師堂駅前カフェテラス&ボンマルシェ」

地下鉄東西線薬師堂駅前広場では、昨年8月より「薬師堂駅前カフェテラス&ボンマルシェ」が始まり、地域の人々の関心を大いに集めています。

マルシェは毎月第4日曜を催し日とし、すでに3回行われ、今年4月に再開予定とのこと。これまであまり賑わいのなかった駅周辺の活性化を目指し、近隣の商店主の方々が昨年4月に薬師堂商興会を立ち上げて、4か月後には第1回の開催にこぎつけました。企画も斬新で、近くの高校と連携し、高校生の活躍の場にもなっています。昨年10月に会場を訪れた際、商興会会長の江刺賢次さんから「高校との共催が大きな特色で、地域の大人と学生が交わることでお互いに勉強になり、役立っている」というお話をいただきました。

食品以外のブースが店を並べているのも魅力的です。整骨院、接骨院、美容院を始め、法律事務所や郵便局のブースもあり、広場を利用したステージイベントもマルシェを盛り上げています。商興会の熱意と努力によって、地域再生がここでも始まったと思うと、嬉しくなりませんでした。

(志子田 記)



▲にぎわう薬師堂駅前広場

荒浜の灯籠流し

昨年、8月18日、荒浜の貞山堀で、震災後初めての夜の灯籠流しが行われました。この催しは、旧荒浜地区の行事として100年以上も続いているもので、住民がお盆に合わせて揃って里帰りするなど、地区としての一大行事です。

震災後は、街の灯りが消えたため、安全面を考慮して、昼や夕方などの明るい時間に実施していましたが、不安が解消しつつあることから、今回、8年ぶりに夜の行事として復活したとのこと。当日は、先祖や津波犠牲者を供養する灯籠200個が貞山堀の川面に浮かびました。物質的な復興は目に見えても、心の復興はまだまだなのかもしれません。参加者はそれぞれの思いをもって見つめたことでしょう。

実行委員長の高山智行さんは、「当日は多くの方が手作りの灯籠を持ってきてくれました。灯籠にあかりが灯ることで、一年に一度でも在りし日の故郷を思い出し、足を運びきっかけになればと思っています。」と、力強く話してくださいました。

(引地 記)



▲貞山堀に浮かぶ灯籠

老人クラブ活動紹介「南鍛冶町宝寿会」

南鍛冶町宝寿会は荒浜地区老連7団体の1つで、平成6年の創立以来、先輩の指導と会員の活発な意見交換により、運営の改善を行いながら楽しい活動を続けてきました。会員が日常的に声をかけ合い、徒歩で集まることのできるような小地域で、町の中心に鎮座する三宝大荒神社境内の町内会集会所を活動の拠点にしています。

活動の主な目的は、仲間づくりを通しての生き甲斐と健康づくりで、「生活を豊かにする楽しい活動」を行うとともに、地域の諸団体と共同して「地域を豊かにする社会活動」にも取り組んでいます。その一環として、年間を通して様々な分野の活動を実施していますが、中でも「ベタンク」は、当会が力を入れている一つです。日曜毎

の練習、仙老連大会への参加等、楽しみながら健康づくりができ、それぞれの生き甲斐にも通じています。

近年、高齢化や社会情勢の変化により、高齢者は介護や介護予防といった課題を抱える一方で、人間関係の希薄化や社会的孤立から生じる様々な問題に向き合わなければなりません。これからの老人クラブ活動は大きな変化を覚悟しなければならないと考えております。高齢者の自立、扶助、公助の認識を深め、人生100年の未知なる社会の経験を後世にしっかり残す努力が何よりも大切であることを痛感する今日この頃です。

南鍛冶町宝寿会会長 新田 秀治

若林区まちづくり協議会

事務局

若林区役所まちづくり推進課内
〒984-8601 若林区保寿院前丁3-1
TEL 282-1111

会報プロジェクトメンバー

リーダー 勝 又 久 雄
西 條 芳 郎
引 地 よ し い
志 子 田 喜 恵 子
清 水 公 七
相 澤 雅 子

編集後記

平成最後の「はいらいん若林」をお届けします。特集は、「まち協」発足時から活動に携わってこられた4名の方々に、これまでの歩みや、苦労されたこと、新しい時代への期待など、若林区への熱い想いを語っていただきました。

今、この会報を読んでいた、まちづくり活動に少しでも興味をお持ちなられた方は、ぜひ一度「まち協」の戸を叩いてみませんか?

スタッフ一同声をそろえて答えることでしょう。「入らいん。」
(まちづくり協議会事務局 佐藤 記)

「第30回若林区民ふるさとまつり」

主催 若林区まちづくり協議会

雲一つない晴天の中、大きな節目を迎えた「第30回若林区民ふるさとまつり」は、昨年以上に大勢のお客様にお越し頂き、大いに盛り上がりました。また、今年度も、若林区役所付近の工事の為に、関係者の皆様に色々とお不便をおかけしましたが、ご協力のお蔭で無事に開催でき、感謝しております。



▲ステージ発表

今回は、毎年好評の、見て体験して楽しむ企画に加えて、若林区に生息する川魚を集めてのザッコすくいコーナーや、若林区中央市民センター主催の子どもすもう大会、30回を記念して、歴代のポスター展示などの新しい企画がありました。昨年よりパワーアップした内容で、ご来場の皆様にはますます喜んで頂けたと思います。近隣の小中学校を始めとする多数の若いボランティアの協力を得ての賑やかな開催も、若林区の特徴であり、これからも大切にしなければならぬ財産です。



▲階子乗り隊 (仙台市若林消防団)

長い歴史を大切にして伝統を引き継ぎ、成長を続ける運営を心がけて、区民の皆様に「ふるさと」を再認識して頂けるよう今後も取り組む所存です。

ふるさとまつり実行委員長 佐藤 康浩

「わくドキまち歩き」で若林区の魅力発信

主催 若林区まちづくり協議会

新しい組織での今年度の「まち歩き」は、プロジェクト名を「若林わくドキまち歩き」とし、以前にも増して元気な活動を行ってきました。前年より回数は減りましたが、内容の充実を図ることで、参加者の皆さんに満足して頂くことができたようです。

1回目(9/8)は、若林区と関わりの深い4代藩主綱村公の小泉屋敷跡(現若林区文化センター)を訪ねるコースでした。薬師堂駅から薬師高砂堀通りを経て文化センターへ向かい、古に思いを馳せました。さらに、七郷堀を眺めながら南染師町に入り、町内に残る唯一の染工場の永勘染工場を訪ねました。仙台藩との関わり、町名の由来や町の盛衰等の説明に、歴史の面白さを堪能できた一時でした。

2回目(11/10)の「震災遺構荒浜小学校コース」では、荒井駅からバスで深沼海岸、荒浜小学校に移動し、遺構の見学等を通して、当時に思いを巡らせました。その後、再開した海岸公園冒険広場と農業園芸センターに立ち寄り、わらアート等を楽しみました。



▲永勘染工場前

今回参加された東京在住の方から、震災当時のままの現場を見て改めて被害の実態を確認でき、参加してよかったとのコメントを頂いたことが印象的です。今後も若林区の隠れた魅力の発信に努めます。

わくドキまち歩きリーダー 永野 仁

若林区まちづくり協議会座談会 新しい時代に新たな前進を 平成の「まち協」をふりがえる!

平成12年4月にスタートした、若林区のまちづくりを色々な形で支援している「若林区まちづくり協議会(「まち協」)」も、長い年月を経て、いよいよ平成の最後の年を迎えました。大きな節目となる今、改めてその存在意義を確認し合い、新しい時代にさらに前進できることを願って、発足当時から長く深くかかわってきた4人にお話をうかがいました。



まち協の経過

司会(西條) 今日(西條)の座談会は、一つの時代の区切りを際して、区民の皆様にも「まち協」の活動をこれまで以上に知ってもらいたいという目的もある。自由な形の話し合いで結構です。まず、「まち協」の目的や理念についてです。



司会:西條さん(まち協:理事)

関わりが、20年ぐらいいてです。20年が、20年ぐらいいてです。

感想をお持ちでしょうか。早坂 「まち協」ができた初めの頃は、形があっても中身は成熟していません。人がいてもかみ合っていない状況でしたが、経過と共に着実に変わって来たと感じています。ただ、期待されるまでに至っていないか、疑問です。

日下 「まち協」の発足当初は、行政から受けてやっていたという意識や構成団体の縄張り意識、仲間意識も縦割りのところがありました。まず、その意識を変えないと、「まち協」の取り組みを進めることは困難とのことで、組織内の横のつながりがつくりをしながら取り組んで来たと思います。佐々木 「区民に顔が見える「まち協」に」という目標はなかなか難しい。横のつながりをつくり、取り組みを共有して喜びあうという難しさも活動しながら感じています。

まち協の存在意義

司会 「まち協」の存在意義を我々がどう感じてどう伝えていくかがまだ明確ではないですね。日下 組織づくりは、成功したと思っています。「まち協」の存在価値が、信頼と共に生まれてきたのかなと思います。早坂 東西線開業関連のイベントを担当させていただいたのもその一つだと思っています。佐々木 東西線の開通により、多くの方に若林区に来てもらって

現在の活動

早坂 地下鉄東西線は確かに功罪はありますが、このことで若林区と他の区が一つの直線で結ばれるというメリットがあるというのを発信する事に「まち協」が寄与したと思います。

司会 以前におこなった話し合いの反省を踏まえて、前会長の日下さんが色々考えより実行力のある「まち協」になってから、「前進した」と言えることが多々あると思います。例えば、多くの組織を引き込んだ区民まつり、区民同士の交流会、内部の総務企画部会等、このことについていかがでしょうか。

佐々木 総務企画部会があり、組織を常に動かしていくという役割をはたして来たと思います。また、行政と区民が一緒に、同じ目線で見ているのも非常に良いと思います。



日下さん(まち協:前会長)

日下 「まち協」の組織には、仲間意識や育成意識が潜在的にあり、このこと、人と人の交流ができるし、居住する区に対する誇りも持っているのではないかと思います。司会 「まち協」はもともと区連協と商店会が主体でしたが、今以上に活発化するためには、区民へと中心が変わることが必要ではないでしょうか。

勝又 平成になり、生産が海外に出ていくなどの状況で、町の商店数が少なくなりました。会員のメンバーも変わってききました。また、町内会もアパートやマンションの増加、役員の高齢化等で地元の



勝又さん(まち協:会報プロジェクトリーダー)

これからの活動

人が少なくなるなどの変化も見られ、難しくなってきたかと思えます。

司会 今後の人口の減少や高齢化などを考えた場合、「まち協」としてどんなことをやっていけば区民の参加を得られるでしょうか。

佐々木 肩書がないと「まち協」を覗けないという思いの人たちもいるようです。町内会や商店会の組織の協力はそれとして、やはり個人を受け入れる工夫が必要だと思います。



早坂さん(まち協:会長)

早坂 もともと「まち協」は各団体の長が集まった組織なので、個人的には参画したくても入れない雰囲気がありました。それが、それをこじ開けて入れるようになった今、さらに広げてよいような気がしています。

司会 人を集めるには、「まち協」は何をする組織か、もっと明確にしなければと思うのですが。佐々木 その点、「まち協」の「しおり」ができたのはよかったのですが、どこまで届いているかが問題です。区全体に知らせるべきではないでしょうか。司会 広報するためにはやはり「まち協」の役割、動き方をもっとはつきりと示さないと、思いだけでは入ってこれないので、その点の準備が必要と考えます。佐々木 若い人の中には、若林区

に興味をもっている人も、就職等で区から離れると、なかなか行動を起こせなくなるというケースもあります。勝又 会報を担当していますが、区民のまちづくり活動の紹介や横のつながりを広げられるような広報を目指して来ました。新たな地域の担い手として10代、20代の若手の参入が見られます。従来の町内会や商店会に固執せず、今後は若者ともコミュニケーション

ケーションをとり、参加を呼びかけてはどうでしょうか。司会 「平成」が終わって次の元号の時代を迎えるに当たり、「まち協」に何を求めますか。早坂 まだ手探り状態ではあります。若林区は他区との先を行けるよう、この区から色々なことを発信してもいいのかなと思いますし、人材の有効活用も役目も果たしながら、新しい元号でさらに一歩前進したいと思っています。

勝又 20代の人たちをどう引き入れ、活躍をどう手助けしていただけるのか、職を終えてまだ活躍できる人たちにどう参加していただけるのか、「まち協」の課題だと思っています。

佐々木 「まち協」自体がまず動きやすい状況をつくっておくのが課題だと思います。これからはまちづくりの悩みを吸い上げてほしい。ふるさとまつりで「まち協」の30年のすゝさを再認識し、改めて行動あるのみと感



佐々木さん(まち協:理事)

日下 この組織がどういう組織であるかをもう一度きちんと確認した上で、行政や色々な団体との関係、そして「まち協」の考え方を示しながら相手に伝えていくことが大事だと思います。

最後に

司会 本日は、「まち協」をよく知るための話し合いを、ありがとうございました。今回の話を参考に、新しい時代に、区民が共に「いきいき・わくわく」した生活を実現できるよう、区民と行政がより連携し、推進させていかなければと思います。

平成31年度 若林区まちづくり協議会の行事予定

| | | |
|--|----------------------------|-------------------------------|
| 4・5月 役員会・総会 | 7月 (第1土曜) 若林区 合唱のつどい | 8~11月 若林区スポレク フェスタ |
| 7~翌3月 76.2MHz 「ラヂオはいらいん若林」放送 ラジオ3にて毎週土曜日午前10時から インターネットで放送を聴くこともできます (サイマルラジオまたはラジオ3ホームページ)。 | 10月 若林区民 ふるさとまつり | 3月 会報「はいらいん若林」 vol.23発行 |

※詳しくは「市政だより」「若林区ホームページ」等でご案内いたします。